

く自宅にこもって山の本でも読んで過ごすしかないなと思っていた矢先、手元に一冊の本が届きました。数か月前に甲信山友会の集まりでお会いした菊地俊朗さんからです。

甲信山友会は、勝沼在住の近藤信行さんと松本在住の菊地さんが「甲信の山はひと続きだから」ということで、面倒見のいい故塩沢久仙さん（元芦安山岳館館長）を事務局として発足した山の勉強会だと聞いています。甲州人でも信州人でもない私ですが、近藤信行夫人緑さんが同じ自然保護委員会の委員だったよしみで仲間に入れていただきました。飲みながら食べながら夜を徹して語り合う雰囲気が好きで今日まで20年近くの長きにわたり参加させてもらってきました。

そんなわけで菊地さんとは、私が自然保護委員長時代に甲信山友会を通じて知り合い、いろいろな場面で手を貸してもらいました。もう15年程前のことになりますが、入笠山から伊那の長谷村へ延びる鹿嶺高原上に数10基の大型風力発電設備を建設する計画が持ち上がり、地元の環境団体や山岳団体などが反対を表明して大きな議論になっていました。自然エネルギーの活用とはいえ、その建設自体が大自然破壊を伴うものであるという観点から日本山岳会自然保護委員会も地元の動きに呼応してその活動に合流し、「自然エネルギーと私たちの未来」～伊那谷にふさわしい新エネルギーの活用を考える～と題するシンポジウムを伊那で開催することになったのですが、その席のコーディネーター役を菊地さんに引き受けてもらいました。菊地さんとは多分その時以来深いお付き合いが始まった気がします。

あの3・11の原発事故を機に、私は太陽光発電を中心とした自然エネルギーを地域に拡げる事業を起業し、今日までその推進にのめりこんできましたが、そんな私個人の活動にも陰に陽に応援頂いてきました。

本題に入りましょう。本書は大きく2つのパートから構成されています。第1のパートは「上高地牧場50年」と題して菊地さんが執筆されており、第2のパートは「徳澤園の85年」と題し、牧場を閉じてから以降の徳澤園について、現在の徳澤園の当主（4代目）である上條敏昭さんが秘蔵の豊富な写真や資料、徳澤園にかかわられてきた多くの人たちからの寄稿文と共に記述されています。



『世紀を超えて 徳澤園135年史』
上条敏昭・菊池俊朗共著
2020年3月13日
(有)氷壁の宿 徳澤園 発行

菊地さんは皆さんご存知のように山岳ジャーナリストとして「北アルプスこの百年」や「釜トンネル・上高地の昭和・平成史」の著書も著されており、上高地について深い知見をお持ちの方です。

かつては杣の山仕事だけの場だった上高地が、牛馬の牧場へと変わり、国立公園の機運の高まりとともに登山者や観光客の基地に変貌を遂げ、最後まで牧場として残った徳澤の牛番小屋が現在の登山客相手の宿に変わっていくまでの姿を綿密な調査を基に史実をたどりながら綴られています。

私が夢中で槍、穂高に通っていたころは、上高地は入下山の通過点でありそこがかつて牧場だったなどとは考えもしなかったのですが、そう言われれば、徳澤園も小梨平もかつてそこで牛や馬が草を噛んでいた場所だったというのは容易に想像できます。帝国ホテルからバスターミナルに至る

左岸一帯と小梨平近辺に広がるカラマツ林も自然林を伐倒した後に植林された人工林だったのですね。これらは上高地が原生の自然ではなく人工との絶妙な調和の下にできあがった自然だということを知っています。

そこが牧場だったと言われれば、誰しも次なる疑問は牛や馬はどこからどうやって連れてきたのだろうと思うわけですが、それについても本書でア－そうだったのかという回答を用意してくれています。そんな上高地牧場運営の中心にいたのが徳澤園初代当主上條百次良でした。

「上高地牧場50年」によれば、上高地牧場は今から遡ること135年前(1885年・明治18年)、百次良が国から上高地一帯の国有地80畝を牧場用地として借り受けた時からはじまりました。それまでの上條家は島々で鍛冶屋を営んでいました。なぜ鍛冶屋かと言えば、当時の島々周辺の多くの人たちの生業が杣の山仕事であり、鋸や斧を作る鍛冶屋が生まれる必然がそこにあったわけです。最盛期には7、8軒の鍛冶屋があったようです。尽山と言われ適木が伐りつくされ、明治政府になると国から禁伐の令がだされ、生業の道が絶たれて困窮の中で活路を見出したのが、百次良が中心になって実現した上高地牧場での畜産でした。

最盛期は400頭を超える牛馬が放牧されていたと言われます。牛馬道は、最初は島々集落の背後の急坂を登って尾根道をたどり、小嵩沢山を経てジャンクションピークから徳本峠に出て上高地に下るルートでしたが、後に島々谷川のルートが整備されて使用されるようになりました。

当初西穂登山口から焼岳山麓にかけてはじまった上高地牧場は、以後、小梨平、明神と場所を移し、最後に徳澤で幕を閉じるまで50年間続きます。その間、釜トンネルの開通、霞沢発電所の建設、焼岳の噴火、国の史跡名勝天然記念物指定、中部山岳国立公園制定、観光客の増加と続き、2代目の当主喜藤次郎のとき、松本営林署からの提案を受けて牛番小屋を登山観光客の休憩・宿泊施設に衣替えをすることになって牧場50年の幕を閉じることになりました。

「徳澤園の85年」については、現在の当主である上條敏昭さんが幼いころに見聞きしたことを含め、冬期小屋の番人として徳澤を守ってきた人たち、徳澤を足場に活躍した若き岳人たち、徳澤園を愛し山を愛した文人、俳人、画家、映画スター、登山家たちやそれをしっかり支えてきた上條家の人たちの姿について記述され、いくつものコラムで徳澤園に係りが深かったそれらの方たちのメッセージも紹介されています。

プロのライターによる著作と違い決して卓越した構成が施されているわけではありませんが、徳澤園の歩みを後世に伝えたいという上條さんの強い想いと併せ、彼の上高地の自然と人への愛しみが感じられ、心温まる思いで最後まで読み通すことができました。以下断片的になりますが本書に登場する人たちや団体について紹介させていただきます。

■伝説のクライマー芳野満彦と冬期小屋

冬期小屋は越冬者や従業員宿泊施設として昭和22年に建設され、そこで芳野さんが冬の小屋番をしていたのは昭和25年からの6年間でした。記憶をたどると、私も学生時代冬山の帰路徳澤の小屋に立ち寄っているのを囲んでしばしば彼と話をさせてもらったことがありました。縁は奇なものと言いますが、そのあと冬の剣岳でも、3日間吹雪で足止めを食らった翌朝、朝日輝く稜線でたこつばからひょっこり顔を出した彼と出っくわしています。

■山岳画家山川勇一郎のこと

芳野さんが冬期小屋で絵の手ほどきを受けたのが山川勇一郎さんだったと知り驚いています。私も、かつて雑誌「山と溪谷」の表紙を飾っていた山川画伯の絵が大好きで、だからということでもなかったのですが、多分記憶の片隅にあったのでしょう。実は私の息子の名前も山川勇一郎です。

■井上靖と氷壁

岩稜会のパーティが冬の滝谷でナイロンザイルが切れて墜死したあの遭難事故をテーマにした井上靖の小説が朝日新聞に連載されたのが昭和31年でした。そのあと大映で映画化され大きな反響を呼びました。その舞台になったのが徳澤園（映画では徳澤小屋）でした。以来、徳澤園は「氷壁の宿徳澤園」という肩書付看板に掛け替えられました。

■八千草薫と映画監督谷口千吉

お二人の新婚旅行が徳澤だったことは知る人ぞ知ることでしょうか。そのあと自然が大好きなお二人は幾度となく当地を訪れています。敏昭さんが上高地観光組合の青年部時代、二人を音楽祭のゲストに迎えてトークショウを企画した際の記述に「宝塚女優の美しさ、しぐさに酔いしれた・・・」という一節がありますが、実感がこもっていました。

■女性初のエベレスト登山者田部井淳子

ご主人田部井政伸さんが書かれたコラム「徳澤園と淳子」によれば、淳子さんは大の徳澤園好きで、「1年に一度はおいしい食事を食べに徳澤園に行こう」と心に決めていたようで、彼の誕生祝に徳澤園に連れてきてくれたと書いています。

■早稲田大学と徳澤園

早稲田が先なのか敏昭さんが先なのかわかりませんが、早大出身で山岳部にも属していた敏昭さんです。昭和24年から平成7年まで46年にわたり早大の体育実技の場が徳澤園だったことや、その指導に当たったのが山岳部員だったのですから、徳澤園が早大山岳部員の定宿だったことは推して知るべしだと思います。

■関西登高会の人たち

昭和22(1947)年に徳澤冬期小屋建設の際の世話人が関西登高会を立ち上げた人たちだったと記されています。関西登高会は同年に設立され、以来多くのメンバーが徳澤園をベースに登山活動をしてきています。同会の初代代表だった新村正一さんは奥又白に入山するのに橋を架けたいという強い願望持っており、没後それが実現して徳澤園上流の梓川に架橋された時、新村橋と命名されたということは本書で初めて知りました。

■日大医学部徳澤診療所

徳澤園のキャンプ場からは見えない樹間にひっそりとたたずむ診療所があるのをどれだけの人がご存じでしょうか。日大医学部山岳部の学生が夏季休暇中1か月だけ開くボランティア診療所がそれです。東京駅近くに前出の新村氏らが開業した登山用具店、秀山荘を医学部山岳部のメンバーが訪ねたとき、徳澤で小屋番をやらないかと言われて先代の徳澤園当主進さんに会いに行くことになった。それが事の始まりで、その時進さんから診療所をやってみないかと言われて徳澤園の1室を借りて診療が始まったのが昭和27(1952)年のことでした。

上高地も時代と共に来訪者が増え外国人も多く訪れるようになった昨今、多様な来客に対応するサービスの提供が不可欠になります。そんな時代のニーズに対応しながらも古くからのファンの人たちを失望させない徳澤園であってほしいと願うのは私だけではないでしょう。バスターミナルか

ら10km、自らの足で歩かなければ触れることができない景観の中に違和感なく溶け込んで建つ徳澤園とそこを訪れる人々を迎え入れる暖かいサービス。「あとがき」で5代目の上條靖大さんが次のように述べているのが心に残りました。

「世界が益々多様化し、便利になればなる程、変わらない上高地の価値が増す・・・前に進むことも大変ですが、周りが進む中、現状を維持することの大変さを痛感しています・・・サービスは変わるけれども、ルールは変えない徳澤を大切に継承していけたらと思います」と。

こんな後継者がいる限り上高地も徳澤園も安泰でしょう。

最後に、本文はいわゆる書評などというものではなく、単なる山好きの一読者が私見を交えて記した読後感であることを申し添えておきます。近藤緑さんからメールとお電話を頂き、本書について緑爽会の会報に書かないかと言われた時は、決して自分がその適任者ではないと思いつつ、会員諸兄姉向けだけなら肩肘張らなくても許してもらえらるだろうという軽い気持ちでお引き受けした次第です。多分緑さんが上高地好きの私を思いだして振ってきたのでしょう。菊地さん、上條さん、失礼のほどお許しください。

『類例のない伊藤孝一の登山』のこと

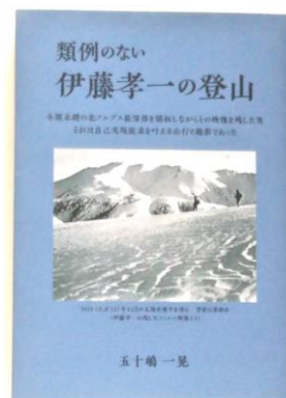
夏原 寿一

この春、五十嶋一晃会員が400ページに及ぶ大作『類例のない伊藤孝一の登山』を上梓された。五十嶋さんのご執筆中、私は僅かではあるがお手伝いをする機会があり、また、上梓に向けた資料の収集方法などを知ることができた。その経緯などを紹介したい。

この発端は2018年4月の緑爽会総会。総会は当初、議事の終わった後に茶話会を予定していた。そこへ、総会の1カ月ほど前の3月中旬、五十嶋さんから「総会当日、もし時間があれば『有峰の狛犬と、それを購入した伊藤孝一』の話がしたいと思っているのだが…」とのお電話をいただいた。それを幹事の皆さんに諮ったところ「これは面白そうだ」ということで急遽、茶話会を取りやめて五十嶋さんのお話を伺うことにし、そのことをハガキで全員に通知することになった。

さて、私はハガキの作成を引き受けたものの、狛犬のことは初耳だったし、伊藤孝一についてもそれほど詳しくはなかった。そんな私がハガキの文面をどう書くか思案しているときに思い出したのが以前、羽田栄治さんが下さった立山博物館の図録『山を撮る・山にカメラを向けた人々』（1998年7月）だった。本棚から出してみると、そこには伊藤孝一の略歴や写真と共に参考文献も載っており、また、辻本満丸が狛犬のことを『山岳』に書いていることも載っていた。早速、ルームに出向いてそれらの文献を読み、翌日にハガキの文案を作って五十嶋さんにメールでお送りしたところ、合格点をいただくことができた。

そのころ、五十嶋さんは想を巡らしておられた伊藤孝一についての本を上梓することに決定し、そのための資料収集にルームに出向くつもりでおられた。しかし五十嶋さんから「家内の体調が優れないので家を空けられない。手数をかけるが調べていただきたい」旨のメールがあり、そこに調査



したい書籍のリストが添付されていた。

そこで私は図書室に出向き、司書の田村典子さんの助けを借りながら調べ始めた。その後、半年あまりにわたって何度か図書室に通ったが、その手の作業は私には全く苦にならないし、新しい世界の広がることもあって楽しくやっていた。一方、図書室で得た情報以外にも、羽田さんに頂戴していた本やプリント、そこから派生して調べのついた情報などもコピーして五十嶋さんにお送りすると「この資料で新しいアイデアが浮かんだ！」と喜んで下さったこともあった。

構想から2年、伊藤登山の深奥に迫った新著の「あとがき」に「日本山岳会の夏原寿一氏と田村典子氏には数々のアドバイスや調査・資料の収集に大変協力いただき…」と載っているのを見て今、なにか面映ゆいものを感じている。

・本書の図書紹介

『山岳』と『山』に掲載する図書紹介について五十嶋さんは当初、ご友人のお二人を予定しておられたが、下記のきっかけがあって「やはり緑爽会の方に書いていただこう」と方向転換された。そのときに頂いたメールの要旨を紹介しよう。

総会の際に、伊藤孝一の登山についてのレクチャーをしたあと、各人の近況を話しているなかで「伊藤孝一の登山をもっと知りたい」と発言した男性がいた。緑爽会には、伊藤孝一の登山にかなり関心をもっている方がいると分かったことがきっかけです。人選は任せます。

図書紹介の執筆は、荒井さんが『山岳』を、小林さんが『山』を担当する。荒井さんは図書委員として今までに何度か図書紹介を『山』に書いた経験があるし、文章を書くことにも長けている。一方、小林さんは、五十嶋さんから頂いた上記メールにある「発言した男性」であり、『雪嶺秘話・伊藤孝一の生涯』（瓜生卓造著）を読んでいたということもあって、執筆に適任と判断した。

*この会報が発行されるころに出る『山』6月号に小林さんの図書紹介が掲載され、荒井さんの図書紹介は、この夏ごろに出る『山岳』に掲載される。

◎羽田栄治さんのこと

前出の図書『類例のない伊藤孝一の登山』および拙文に度々登場している羽田栄治さんは、山岳映像の世界にその名を残された。緑爽会会員でありアルパインフォトクラブの代表でもあった羽田さんの知られざる姿を紹介したい。(『山岳』2014年、『山』No.817に追悼記事)

▶富山県の立山博物館は、山岳映像の持つ資料性に着目してその収集に力を入れている。羽田さんは、立山博物館の出版物への寄稿や企画展への助言、収蔵されている伊藤孝一のフィルムの調査、分析、編集などに尽力された。

右の写真は羽田さんの名刺で「とやまふるさと使節」とある。裏に【「とやまふるさと使節」は、富山県の自然、文化、観光、産業などの魅力を全国に紹介していただくため、県外在住の各界各分野でご活躍の方々に、富山県からお願いしています】。



▶「羽田さんはおしゃれ…」、これはフォトクラブの皆が思っていたことだ。いつもきちんとした身なりをされていたからだ。あるとき、例会の始まる前の雑談中に誰かが「羽田さんはおしゃれだから…」と言うと、羽田さんは「爺むさいのは嫌だからね、ハハハハハ」。

▶羽田さんは1960年の全日本山岳連盟の初の海外遠征に特派員として参加、ジュガール・ヒマールの記録映画『未踏の氷壁』を、山岳映画として初めて35mmシネマスコープ版で撮影された。

- ルームからの帰りの電車でご一緒したとき、私が出して「登るのも大変なのに、それを撮るといのはすごいことだと思います」と言うと、羽田さんは「プロだからね、ハハハハハ」。
- ▶報道畑におられた羽田さんは1960年、谷川岳の宙吊り事故の取材にあたっていた。自衛隊が銃でザイルを切った、あの現場である。羽田さんが撮影されたそのときの映像をフォトクラブの例会で見た。それは目をつむりたくなるような場面の連続だった。映写が終わったあと羽田さんは「ザイルが切れたとき、思わず拍手しちゃったんだよ。あれは不謹慎だったね」。
 - ▶羽田さんは、代表を務めておられたフォトクラブの会報に毎月、A4で1ページの巻頭言を書いておられた。話題はもちろん写真関連だが、ときにはこんなことも♪
「私のもっとも好きな季節は新緑の頃。……5月といえば、学生時代にドイツ語で覚えたハイネの詩“Im Wundershönen Monat Mai”(麗しき5月の空に)を思い出します。シューマンの代表的な歌曲『詩人の恋』の冒頭にあり、春を愛の告白になぞらえドイツの5月を讃えた歌曲としてよく知られています」
 - ▶2011年、晩餐会の会場が従来の高輪プリンスホテルから品川プリンスホテルに移ることになった。晩餐会で写真展を担当するフォトクラブとしては写真をどのように飾るか、現場を見ておく必要がある。その下見に行かれる羽田さんのお供をした。右の写真は、額のサイズに切った紙で展示の様子を検討しているところである。(総務委員撮影)
- 下見の済んだあと、ホテルのフードコートに行った。サンドイッチをつまみながら羽田さんはバッグから新聞の切抜きを取り出すと、「シューベルトの新しい楽譜が見つかったと書いてある。200年も前のものが今頃になって出てくることもあるんだね」。そのあとコーヒーを飲みながら音楽談義。山以外の共通の話題で盛り上がるのもいいものだ。



第一級の資料・会報「山」合本

吉田 理一

日本山岳会機関紙の会報「山」は2020(令和2)年5月号で第900号を数えることになった。会報「山」は50号毎に合本・製本を本部事務局で斡旋して下さっている。50号というと4年2か月毎にという事になる。私はJACに入会して今年で42年になるが、50号毎の合本が今回で奇しくも丁度10冊目の製本となる。私と会報「山」合本との関わりを振り返ってみたい。

1. 会報「山」の歴史的な価値

歴史的・文化的価値については南川金一氏が第800号(2012年1月号)に「井戸を掘った者を忘れず～800号に寄せて」と題し2ページにわたり詳述されている。その中で南川氏は「日本山岳会百年史」の編集にあたっては何千回も繙いたと述べているほど貴重な資料である。

2. 通巻を揃える苦労談

南川氏の文章に触発された黒田正男氏は会報「山」を通巻で揃える事を決意した。黒田氏は欠号

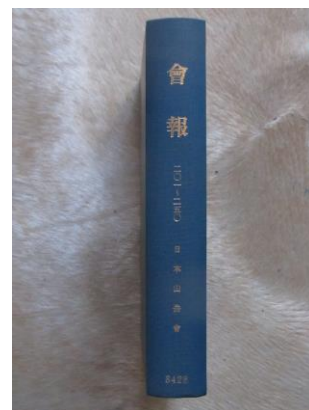
分を単純にコピーで補充するような安易な方法には満足せず、合本・製本する際の体裁も考えて両面コピーにこだわり、並々ならぬ苦勞をされて志を貫徹された。その苦勞談が第 809 号「会報『山』を通巻でそろえる」に載っている。黒田氏とは面識は無いが「蛇の道は蛇」の諺を思い浮かべた。

3. 大修館書店による復刻版出版

JAC 創立 70 周年記念事業として「復刻 日本の山岳名著」が大修館書店より刊行された。第一期刊行の 1975 年に会報「山」1 号～100 号、第二期刊行の 1978 年に第 101 号～第 200 号が復刻出版された。

私の JAC 入会は 1978 年 5 月であるので第 395 号から会報は毎月本部から送られてきている。したがって大修館書店の復刻版で入手した第 200 号の後、第 201 号から入会前の第 394 号までが空白であった。

当時は本部事務局で残余の会報を 50 号毎に合本・製本して頒布していたので第 301 号から第 350 号と第 351 号から第 400 号の合本 2 冊は簡単に入手できた。第 201 号～第 300 号は山岳古書専門店の「穂高書房」で 50 号毎の合本を 2 分冊で同時に入手できた、南川・黒田両氏の収集の苦勞談に比べると通巻を合本で大した苦勞もせず入手できたのは今考えると運が良かったという他は無い。入手年月日は記録していないが昭和 50 年代の後半だったと思う。



4. 穂高書房の和久井氏

阿佐ヶ谷の穂高書房には当時何回か通った、店主の和久井正明氏と私は同い年である。和久井氏の父親が新潟県松代町(現十日町市)のご出身であり、旧盆には父を車で六日町から八箇峠を越えて松代町にお墓参りに連れて行った事などを懐かしそうに話された。六日町の地酒「八海山」を手土産にお店に伺った事もある。和久井氏からは「日本山書の会」への入会を勧められて会員名簿を見せていただいた。錚々たるメンバーが名前を連ねていてとても私の出る幕ではなかった。

なお、八箇峠は 2017 年自動車専用高規格道路の一区間として全長 2840 メートルの「八箇峠トンネル」が完成して首都圏から十日町市・旧松代町・松之山温泉には四季を通して快適な運転で通行できるようになった。和久井正明氏は 2019 年 8 月死去、第 899 号に児玉茂氏による追悼文が載っている。

5. 第 200 号台は欠号多し

穂高書房で入手した合本第 201 号から第 250 号の中で第 202・203・204・205・206 号はゼロックスのコピー版である。和久井氏をもってしても入手出来なかったとの事である。

第 201 号～第 250 号のうち何号かは JAC 本部でも欠号だったのか、かつて会報で一般会員に提供依頼の呼びかけがあり会員から提供されたとの報告が会報「山」でなされた事があった。

6. 製本業者が廃業

第 600 号発刊後数か月しても会報に合本制作の案内が載らず心配になり上京の折 JAC 本部事務局に尋ねた。従来依頼していた製本業者が廃業して新たな製本業者を探しているとの事だった。この時驚くべき残念な情報を聞かされた、旧来の業者が持っていた武田久吉氏デザインによる JAC ロゴマークの金型も



無くなってしまったという話だった。

第 501 号～第 550 号の合本までには JAC ロゴマークが表表紙には金箔押し、裏表紙にはプレスしてあり JAC の文献に相応しい風格が漂っていた。

7. 会報「山」デジタル化して web で公開へ

第 896 号(2020 年 1 月号)に会報「山」第一号から最新号までの寄贈があり JAC 創立 120 周年記念事業の一環としてデジタル化し web で公開する計画との会務報告がある、寄贈者名は公表されていないが大変な朗報である。

会報「山」には 50 号毎に索引が作成されている。索引により必要なデータをインターネットで何時でも閲覧・ダウンロード出来るし、紙データとして保存が必要な記事はプリントアウトも出来るようになる。家庭用の PC プリンターでも両面印刷が出来る機種も普及しているので製本して居ながらにして蔵書とすることも可能である。昭和の時代に育った私にとっては夢のような話である。

退 却

瀬戸 英隆

21 年ぶりのその山は、たつぷりと秋の気配を漂わせ、樹木は黄色と赤に染まっていた。登山口でカードに記入して歩き出す。他に登る人もなく我々二人の足音が曇空に淋しく響いていた。登り出してすぐ難所の右側への巻き道が崩壊している旨の立て札があって、私は「こりゃちょっとまずいかな」とつぶやいた。同行の 0 は何も言わず下を向いて後からついて来る。誰も居ない山というのは静かなものだ。昨日の山が嘘のような別世界を我々は歩いている。初めからの急登で少々息が弾むが、お互いに自分のペースを守って歩く。時々 0 がカメラを出して紅葉を撮る。「昨日よりきれいな気がする。特に赤がいい。木の種類が違うのかな」と 0。「そうかも知れん」と私。お互いに樹や花に不勉強でそれがわからぬ。でもいい、キレイはきれい、それでいいんだと心の中で思う。0 は 1 か月前の誕生日に愛妻からカメラをプレゼントされたと言い、昨日も今日も 2 台持って撮りまくっている。もう 1 台はいつものバカチョン。

1 時間足らずで開けた場所に出る。ああ、ここだった。21 年前の記憶が蘇る。この少し上にもう少し広い所があったが、まあここでいいだろう。1 本立てるか？ と言うまでもなく息ピツタリの我々はザックを降ろす。水を飲み飴を一つ口に入れて出発。まだ 9 時半だ。すぐ上の広場は 10 分後に通過。いよいよ岩場が近づいて来た。出発した時より更に暗くなったような気がする。朝ラジオで聞いた予報通り間もなく雨か？ 次から次へと岩場が出て来る。トラバースする所、垂直に登る所、全て鎖が付いているが、二人ともできるだけ使わず素手で登るようにする。鎖が白く光っている。新しいのだろうか？ いくつも越えるうち、私はかなりの疑問を持って来た。

21 年前、まだ 42 歳の若さで、この程度のコースに不安など微も感じないはずだが、しかしあの時は妻と二人の子供を連れていた。長女は 5 年生、次女は 2 年生だったか？ まさか、こんな所をどうやって通過したのだろうか。まったく記憶にない。歩きながら 0 に話をすると、たった一言「無謀だったんじゃないの」。「うむ、無謀か、そうかも知れん」、応えながら私は、ではこの上の最大の難所はいったいどうして通過したのかと思った。不思議とそのことだけはよく覚えているのだ。先ず三人のザックを全部向こう側に運び、空身になって二人の子供を一人ずつ抱いて通過したのだ。

そのあと頂からゆび指して地形を説明する私に長女は泣きながら「パパ、もういいよ、もういいよ」と言っていた。かなりの恐怖だったのだろう。「その恐怖が二人とも山嫌いにさせたのじゃないか？」再び0がチクリと刺した。その通りだな、まずかったか。初めて当時への反省の気持ちが出る。同時に急に不安が胸に広がった。大丈夫だろうか？ 登れるだろうか？ 万一・・・いや考えるまい。

いよいよ難所が近づいた。かなり険しい。この一枚岩を越えた所がその場所だ。ストックをたたんでザックに刺す。0が「ザイル出すか？」と聞く。「もうちょっと行ってみる」と応えて登り切った所がその場所だった。思い出しはしたが、21年前と比べて巾が狭くなっているようだ。30センチくらいしかない。いやもっと狭いか。当時はこの倍はあった筈だ。西側は鋭く切れていて転落すれば将に死だ。あの時私はここを二人の娘をかかえて立って歩いたのか、信じられぬ。でも今日は0と二人、慎重に行けば大丈夫だろう。いや這って行くか、座ってそのまま進むか、少し恐怖心も出て来た。一度腰を降ろそう。まず0を先頭にして狭い稜線で身体を入れ替え、彼のストックをザックに入れてやる。彼が前へ出たので、一呼吸入れるつもりで座り込み足を引っ込めたとたん、右足が攣った。いかん、慌てて左足を引っ込める。こっちも突っ張る。すぐくまずい！「すまん0、足が攣った。引き返したい、いいか。本当に悪い、申し訳ない。」と同意を求める。しばらく0は黙っていたが、「よし帰ろう」と言って身体を反転させた。

「そんなものさ、年齢とともに同じ山でも難しさ、恐ろしさは上昇するんだよ。誰でも同じ事さ。」数分後、下山しながら0はそう言って慰めてくれた。かなりのショックと屈辱感で私は言葉を失っていた。山へ登って初めてのことだった。「少し休むか？」0がまた言ってくれた。「うむ、ゆっくり行く」と応えてピッチを下げ、しっかりしろと自分に言い聞かせて歩き出した。

信州、戸隠山。蟻の戸渡りからの21年ぶりの登頂は成らなかった。退却という屈辱感、しかし勇気ある行為なのだと何回も何回も心の中で叫んでいる自分だった。

昨日登った黒姫山の方向を見た顔に、雨が一粒、二粒と落ちて来た。

(当原稿は瀬戸さんが63歳の時のものです。今回コロナ巣籠りで発見されたそうです)

「岡野金次郎ファミリールーツの探求」のあらまし

渡邊 貞信

ここでは次号に掲載される表題についての【あらまし】をご紹介します。

昨年10月の緑爽会例会で「日本山岳会草創期の二人・・・小島烏水と岡野金次郎について 二人のお孫さんを交えて」と題した講演会が開催されました。

そのなかで私は主に岡野金次郎の妻、トヨさん側についてあまり知られていない面等エピソードを交えてご紹介しました。岡野金次郎は盛んに山へ出掛けていた頃から沢山の日記をつけていたと言われていますが、残念なことに関東大震災で皆焼失されたと聞いています。従って、登山活動の詳細を語りつくせる資料等が少なく、どうしてもエピソード主体の話になってしまうきらいがありました。

近代登山の歴史上では、ともすれば文筆が立つ小島烏水が前面に出て目立つ存在ではありますが、岡野金次郎による日本山岳会創設のキッカケを作った功績は偉大なもので、もっとクローズアップ

されてもよいと思っています。

幸いなことに今回、『岡野金次郎評伝（仮名）』という本の出版の話が持ち上がって、より岡野金次郎を理解して頂けることになれば大変嬉しい限りです。

出版に向けては現在、鈴木利英子氏が執筆中ですが、著作への協力依頼があり、私も現在調査等を手掛けています。単に執筆者に対する協力に留まらず、親戚である関家（トヨさんの側）の人々との付き合いのなかで、私自身が幼少のころから疑問に思っていた岡野家、関家との関係やその他の親戚関係に係る調査を手掛ける絶好の機会を頂いたと受け止めています。

岡野金次郎側の兄弟とトヨさん側の親戚とのお付き合いの様子が従来あまり分からなかったのですが家系等を調査してゆくなかで思わぬ繋がりがあつたり、今迄知らなかったことが分かってきたりして、わくわくする展開もあってやりがいのある調査となっています。

さて、私の一番近い関家の人々はもともと盆栽業を営む家柄で、親戚と言っても山登りに関しての岡野家との繋がりは全くないことから、山に関する情報は入りにくい状況でした。

今回、偶然にもトヨさんの娘、渋谷テル子様の娘さんが桜新町の関家を度々訪ねて下さり、書き置きを残して頂いたことで、私の姉が気づき連絡してくれたことが調査のキッカケとなりました。関家は盆栽の本場である埼玉県安行へ移住して留守で、姉が管理を委託されていたのです。

早速渋谷様に連絡をとらせて頂いてからの展開は次号の本編でお知らせいたします。私自身の岡野家とのお付き合いという点では、関家を通じて金次郎、トヨ夫妻とお会いしている他、金次郎の長男昇氏の長男である岡野修氏には日本山岳会入会時の紹介者になって頂きましたし、その後修氏とは退会される前までは毎年のように海外トレッキングを重ねた間柄にあります。

ただ、今回は渋谷家の他、金次郎三男満氏の長男、眞氏と知り合い本編に展開される活動においていろいろご協力をして頂き、お陰様で大変中身のある内容になりました。また、小島烏水氏の弟、栄氏の記述に出てくる望月達夫氏などとの関係が分かり成果がありました。

今回、調査活動を遂行するなかで特に印象に残ったのは、渋谷の小川家（トヨさんの母方の親戚）への訪問でした。全くの突然の訪問にもかかわらず快く迎え入れて下さり、貴重な家系図等の資料や写真等を頂けたこと、それによりその後の岡野家との家系の繋がりが解明できたことは大きな成果でした。

それにもまして幸運だったことは、訪ねた時、小川家では正に断捨離の真っ最中であり、偶然にもいろいろ知りたかった資料や写真を提供されたことです。ご家族の優しさと親切さに親近感を感じた瞬間でした。

次号では、解明出来た事柄や、その際のエピソードなどをお伝えします。是非楽しみにして下さい。

禍を転じて福と為す？

荒井 正人

思わぬコロナ禍で蟄居を強いられた。とはいえ、山に行けないとか、外出には気をつける、といったことだけで、東京へ出る機会がなくなって時間ができ、結構自由である。じっと我慢しているわけでもなく、家で何だかんだと好きなことをしている。こんな時でないと出来ないと思って、本や紙の資料の整理もした。すると面白いものや懐かしいものを発見し、ついつい見入ったり読んだり、時にそれについて書いたりしてしまう。

そんな中パソコンが壊れた。ハードディスクが危ないと言われ、出費は痛かったが取り換えた。すると、修理の過程で4年前にメールが見られなくなった時のアドレスが復元され、10年近く前からのメールが見られるようになった。凡そ千通のメールを見ながら消していくと、残ったものの多くは2014年のものだった。振り返れば、2014年は私にとって実にエポックメイキングな年だったと気づかされるのである。

最も大きな出来事は自費出版だろう。おかげで貴重な体験をすることができたし、多くの方と知り合うきっかけになった。山登りという面では、夏の北海道で九州の方との出会いがあり、本格的な沢登りとして近藤雅幸さんに連れて行ってもらった笛吹川釜の沢、続く白根南嶺縦走がある。9月中旬には還暦の仲間で北鎌尾根を縦走した。定年後にいくつかのバリエーションルートを経験したが、やはり北鎌は別格だった。その10日後には先輩を御嶽山に案内したが、まさか4日後に噴火するとは思わなかった。

九州時代の先輩から誘われて台湾の玉山に登ったのもこのすぐ後のことである。九州へ向かう飛行機からは御嶽山の噴煙が東へ長く伸びているのを目にした。快適な玉山登山から福岡に戻り、夏に会った北九州の方と福智山にご一緒したのも思い出深い。

前年6月にロッジ山旅に初めて泊まり、長沢さんの勧めもあって入会申込書を打ち出していたが、その後日本山岳会に入会することができた。秋の「高橋健治と妻ローゼ・レッサの生涯」のシンポジウムは今でも記憶に残る。そんな山岳会の新参者として迎えた2014年だった。

こんなことに気づかせてくれたパソコン故障、いやコロナ禍。何が幸いするかわからないものだ。

～～《予告など》～～

7月例会：「暑気払い」を予定しておりましたが中止とします。ルームの使用条件では土曜は閉室、平日でも入室人数制限の上、飲食不可とのことであり、残念ですが、開催は困難と判断しました。これに代わる催しを検討中です。

9月山行：9月11日（金）

高尾山（5月に計画していた八十八大師巡り）を予定していますが
現下の状況を勘案し正式なお知らせは次号（8月25日発行）で
お知らせいたします。（コースなどは4月会報をご参照下さい）



会費納入の件：総会が書面審議となったため、現金での徴収が出来ませんでした。

全会員の皆様に、以下の口座へ新年度会費＜1500円＞を「振込」にて納入して
いただくようお願いいたします。

- ・ゆうちょ銀行からの振り込み 10000-18539041 「リョクソウカイ」
- ・他の金融機関からの振り込み 008-1853904 「リョクソウカイ」

※他の金融機関からの場合「支店名」は「ゼロゼロハチ」と入力してください。

―― 編集後記 ―――

拙文でも触れましたが、新型コロナウイルスにより、皆さまも様々な制約を受けられていることと思います。県外への移動制限も解除となりましたが、経済活動の活性化と、人の命とを秤にかけた、バランスの取れた取り組みが大事だと思います。とにかく正しく恐れることだと自らに言い聞かせつつ、可能な範囲で山歩きも楽しみたいと思います。これから暑くなります。くれぐれもお身体にはお気をつけください。（荒井正人）
次号予告＜8月25日発行の主な内容＞

「岡野金次郎ファミリールーツの探究」他 ＜皆様からの投稿をお待ちしています＞